

江戸前の海 学びの環づくり 瓦版 第2号

著者	馬場 治 , 宮崎 佑介, 小島 貞明, 大島 弥生
雑誌名	江戸前の海学びの環づくり瓦版
号	2
ページ	1-8
発行年	2007-09-15
権利	Posted with approval of the Edomae Education for Sustainable Development (ESD) program of Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT).
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00001771/



えどまえ うみ まな わ
江戸前の海 学びの環づくり
瓦版 第2号



江戸前ESD協議会 〒108-8477 東京都港区港南4-5-7 東京海洋大学海洋科学部

江戸前の漁業から環境を考える ～ 都市住民と漁業の接点～

馬場 治 (東京海洋大学・海洋科学部・海洋政策文化学科 教授)

江戸前の魚は？、と聞かれてすぐに思いつくのは、アナゴ、シャコ、カレイなどではないでしょうか。しかし、東京湾で漁獲されるこれらの魚の量は大きく変動しています。最近に関して言えば、シャコの漁獲量は大きく落ち込み、アナゴも以前に比べてかなり減ってきています。

このような現状を知らされると、マスコミはすぐに「乱獲や環境の悪化が原因」と短絡的に報道し、一般市民もそれを信じ込んでしまいます。マスコミはセンセーショナルな報道にはすぐに飛びつきますが、研究者の地道な研究成果にはほとんど関心を示しません。ですから、研究者が資源の変動の原因を客観的に述べてもマスコミに取り上げられることはほとんどなく、市民は真実を知らされないまま、一方的な報道に翻弄されることになるのです。

このことは、東京湾のように、普段身近に海に接する人の少ない沿岸域ではなおさらです。東京湾で一般市民が海の生き物に直接接する場面は、潮干狩りか釣りが一般的ですが、それにしても年に何度も行くわけではないでしょうから（一部の釣りマニアは別ですが）、これらの海辺での活動を通じて環境の変化を感じることはまずないと言ってよいでしょう。

しかし、これらの環境の変化を誰よりも身近に感じている人たちがいます。それが東京湾で漁業を行っている漁業者達です。東京湾の漁業者は、昭和30～40年代にかけての臨海部の埋め立ての進行で漁業からの撤退を余儀なくされましたが、それでもまだ漁業で生計を立てている方が多数います。彼らは、漁業活動を通じて常に環境の変化を直に感じ、その中で生き延びていくために環境改善の必要性を訴え、また、実際に改善のための活動にも取り組み始めています。

一方、都市住民は直には環境の変化を感じなくても、環境の悪い都市に住んでいるがゆえにこそ、環境への関心は人一倍高いと言えます。

大都市になればなるほど都市住民と漁業との接点は希薄になりますが、上に述べたように、大都市の沿岸で漁業をしている漁業者だからこそ都市住民と同様に環境には無関心ではられないのです。したがって、都市の沿岸部で漁業が持続的に行われることは、すなわち、都市住民にとっても望ましい環境が維持されることを意味します。

都市であるがゆえにこそ漁民と都市住民はもっと緊密に接点を持つことで、同じ思いで活動ができるはずで、漁民はもっと住民に近づく努力を、そして住民は漁業にもっと関心を持つことで、身近な沿岸環境を良くしていく力となると思います。



馬場 治 (ばば・おさむ) 高知県の山間部生まれ。子供の頃から川に潜って魚を捕って遊び、50を過ぎた今でも川に潜っては魚を捕まえたり、観察したりして遊んでいます。我が家の三姉妹もみんな川遊びの虜で、毎年夏には実家の近くの川に家族全員で潜りに行っています。
「江戸前の海 学びの環づくり」(江戸前ESD)瓦版編集委員長。専門は漁業経済学。

江戸前ESDニュース

第1回江戸前ESD協議会が開かれました

宮崎 佑介

去る7月10日、東京海洋大学（以下、海洋大）品川キャンパスにて、第1回江戸前ESD協議会が開催され、船の科学館、大田区立郷土博物館、NPO法人地域パートナーシップ支援センター、同ESD-J、同エコ・コミュニケーションセンター、港区のアナゴ漁師さんなど多くの方々にご参加いただきました。プログラムは右のとおりです。

この協議会の主眼であるグループ・ディスカッションでは、江戸前ESDの今年度の活動の場、港区と大田区の二つのグループに分かれ、江戸前の海の「持続可能な発展のための教育（ESD）」のために何ができるのか、どう関わっていけるのか、などについて話し合い、活動方針を策定しました。

港区のグループでは、湾岸を縦横に走る運河を活動の場とする意見がたくさん出ました。ここでは、最終目標を「海洋大の関与なしで、住民が環境啓発の循環を生み出せる流れをつくる」とし、そのための住民参加や地元小中学校と海洋大との関わり方について、「時間」と「海洋大の関与の度合い」の二つの軸に分けて模索しました。

一方、大田区のグループでは、今年4月にオープンした「大森ふるさとの浜辺公園」（通称、ふるはま）での活動について話し合い、「経済・暮らし」、「食」、「自然」、「安全・安心」という4つの視点にもとづく活動を考え、それらを「お祭り」という場でまとめよう、という提案が出されました。

そして最後に、これらを単なるアイデアで終わらせないために、

継続的なワークショップの開催、
これらの案の具体的なスケジュールづくり、
江戸前ESDネットワークの形成を今後の活動内容に組み込んでいくこと、

の3つを確認しました。

この協議会の後、ワークショップを行いながら、それぞれの案の実現へ向けて、一歩ずつ進み始めています。江戸前の海の「学びの環」をこれからどうやって、どれだけ広げていけるのか、参加者の一人として目が離せません。

江戸前ESDは、試行錯誤で軌道修正を重ねながら、持続可能な東京湾をめざす循環を地域で生み出そうとしています。そのためには、さまざまな視点やご意見、すなわち、多くの方々の参加が不可欠です。



議論が白熱しています。手前右が筆者。

この報告を読んで、少しでも興味を持って頂けたなら、ぜひ江戸前ESDに関わって下さい。
あなたの参加こそが江戸前ESDの原動力です！

（みやざき・ゆうすけ 東京海洋大学・海洋政策文化学科4年生）

第1回江戸前ESD協議会 プログラム

「ゆたかな江戸前の海を守っていくには・・・
私たちの協働で何ができるか」

日時： 2007年7月10日(火) 13:30-16:30
場所： 東京海洋大学品川キャンパス2号館

1. あいさつ（河野 博 教授）
2. ワークショップの課題提起
 - (1) 江戸前ESD活動状況報告と前回ワークショップ（1月20日）のふりかえり
 - (2) 江戸前の海 近況ご報告
 - (3) 今回のキーワードについての解説
ゆたかな江戸前の海とは（河野 教授）
私たちの協働とは（池田 玲子 教授）
3. グループ・ディスカッション
「協働でおこなう活動企画書をつくらう」
4. グループ報告
5. 全員で活動計画の概要をつくらう

江戸前の海 学びの環づくり～私たちが活動しています

江戸前ESDは、大田区につくられた人工海浜、「大森ふるさとの浜辺」、通称「ふるはま」を舞台に活動を始めました。参加されている方々のなかから、今回は3人をご紹介します。（ふるはまの写真は最後頁に掲載しています。）

藤塚 悦司（ふじつか・えつじ） 大田区立郷土博物館 学芸員

「海苔のふるさと」と呼ばれる大田区大森に、「大森ふるさとの浜辺公園」が本年4月に開園しました。私は、その浜辺公園に来年の4月開館を予定している、資料館の開設準備に携わっています。資料館は江戸前の海苔作りの歩みや、海苔産業がこの浜から各地へ伝えられたことなどを、地域の人々が主体となって伝える施設です。この、浜辺公園と資料館という取り合わせを、ぜひ活かしていきたいですね。生活から隔絶していた東京湾が身近となった浜辺と資料館が、江戸前ESDの活動に触発されて、発見と感動の場となっていくのが楽しみです。浜辺ができて元気になった元漁業者、浜辺で子供を遊ばせたい親たち、浜辺で発見学習をしたい小学教員などなど、様々な人々が注目しています。



白い渚で待ってます。



日野 佑里（ひの・ゆり） 東京海洋大学・海洋政策文化学科 4年生

皆さん、「ふるはま」を知っていますか？それは、都内にオープンしたばかりの白い砂浜が広がる人工海浜公園です。

現在私は沿岸域環境研究室に所属し、「大森ふるさとの浜辺公園(ふるはま)を利用した環境教育」をテーマに、卒業研究をしています。

江戸前ESDでは、主に大田区と海洋大の橋渡しをしています。具体的には、ふるはまで何ができるかを考えるワークショップを、地域の方々と共に行ってきました。また実際に、小学校のふるはまを使った環境教育のお手伝いもしています。これまで、人との繋がりを大切にしながら、学生という立場でできることを行ってきました。様々な関わりの中で新しいものを生み出す面白さを、もっと多くの学生の皆さんに味わっていただきたいと考えています。

ふるはまが、より地域に密着した、多くの人に愛される場所になるように、一緒に江戸前ESDに参加しませんか？

子供たちの体験学習のサポートは趣味の1つ。
元気な子供たちの笑顔に癒されます！

堀本 奈穂（ほりもと・なほ）東京海洋大学・海洋環境学科 助教

私は、海の中の小さな生物にはどのようなものがあるのか、その生産がどのようになっているのかを調べています。植物プランクトンと呼ばれる生物群ですが、顕微鏡を使ってそれを見ると、さまざまな形のもので、まるで宝石のように輝いています。東京湾の茶色に見える水には、それらがたくさん居ます。

東京湾は、資本主義の発展とともに栄えた世界有数の場所です。昔は殺風景だった大学近くの運河沿いの風景も、いつの間にかとても都会的になりました。一方では、今日も太陽光を浴びて元気に増殖する植物プランクトンはいるし、ボラは跳ねるし、イッカククモガニは泳ぐし、ウミネコは何かをねらっています。江戸前ESDによる体験を通して、この東京湾に生息する生物と私たちとの関係を考え、その発想をみんなで共有することができると期待しています。



Take it easy ;)

INTERVIEW

江戸前の海に投網を打つ 小島貞明さんに聞く

去る2006年11月11日、授業「海洋産業解析実験」の一環として、海洋大学生6名、教員2名で、小島貞明（こじま・さだあき）さんを旧江戸川の今井橋に訪ねました。小島さんは、屋形船「あみ貞」を経営しながら、東京湾に江戸時代末期から伝わる細川流投網の継承者として「江戸投網保存会」副会長も務められています。

小島さんが経営する屋形船の座敷でお話を伺いました。（以下、記事中のQが質問者です。）

屋形船は密閉された動く空間

Q 屋形船はどのようなお仕事なのか、教えてください。

小島 屋形船は、居酒屋と違って、密閉された動く空間であると言えます。他のお客さんの出入りが一切なく、仲間だけのプライベートな場所で、周りを気にしないでよいですが、時間はきっちり決められているのと、一度乗ったら逃げられないので、最後までいなきゃならない。だいたい、2時間半から3時間くらいです。

Q お客さんはどういう方ですか。

小島 やはり年齢層が高い方のほうが多いですが、若い方や学生さんも利用しますよ。

Q スタッフ何人で運営されていますか。

小島 通常は、操船、てんぷらを揚げる料理人、配膳と船内サービスの最低3人でやります。

Q 東京湾のどのあたりまで行かれるのですか。

小島 江戸川から行くときは、葛西臨海公園の付近、お台場の方に行くこともあります。

Q 船を泊める場所は定められているのですか。

小島 ありません。営業許可を受ける際に、あらかじめ不定期航路を申請しなければならないので、基本的にそれを外れて操業できないことになってい

ます。

Q どういう資格が必要でしょうか。

小島 船舶免許、保健所営業許可、漁業許可の3つです。この船は、20トン以上なので、私は6級海技士を取得していますが、小型船舶免許で20トン未満の船で営業しているところも多いです。

Q 屋形船はいつ始められたのですか。

小島 現在の形になったのは約25年前、釣り船の延長で、私は3代目です。お客さんのほうも、昔から3代、4代に渡って来てくれるお客さんもいます。

投網を打つ順番は腕前で決まる

（昭和の初め頃の投網の写真をを見せていただきながら）

小島 これはうちの祖父の代の写真です。網船が何隻も並んで、たいてい6、7隻で網を打っている。これは「並べ打ち」、「寄せ打ち」と言って、魚を追い込んで、一人が打ったら、次に誰が打つ、と決めておいて、順番にやりました。

Q どういう順番ですか。

小島 上手い人から。打つと遠くに飛ぶ網を持っている人が先に打つ。舟から遠くに打つから、そのぶん魚もとれる。舟の近くは、エンジン音があって、近づくと魚が逃げてしまう。昔は水がきれいだったから、船を見て魚が逃げるので、今よりも遠くに飛ばさないと、網に魚が入らなかった。

Q 投網ではどういう魚を獲るのですか。

小島 なんでもだけど、底物は網に入らないから、やっぱり中層にいる魚かな。

Q スズキやイワシですか。

小島 そうですね。ただ、近頃は、イワシはあまりいません。昔は、イワシはいくらでもいて、群れに網をかぶせると、大群なので網がすばまないし、網目にイワシが詰まると、重くて上がってこない。自分もそれで2回ぐらい、網を駄目にしていました。打った瞬間に魚でいっぱいになって、網が開いたまま沈んでいかない。そういう時は、仕方が無いから、途中で網を手繰って、切って上げるしかありません。

あと、昔は夏から秋になると「並べ打ち」でシバエビを獲っていました。今でも、シバエビは

屋形船の座敷で小島さんにお話を伺う。（撮影：辰巳ちあき）





旧江戸川河口で投網を打つ、小島貞明さん。(撮影：辰巳ちあき)

葛西沖か羽田沖にいます。

Q 今、シバエビが獲れるということは、東京湾に生き物が棲みやすくなっているということでしょうか。

小島 そうですね、実際、昔の一時期よりは獲れるようになりました。あと、ズキやアユは入ってくるけど、ボラは5~6匹いたら2匹入れればいいほうじゃないかな。

網の目も、魚によって変えていきます。小さい魚を獲るときは小さい網目、大きい魚を取るときは大きい網目というふうに。

Q 網はどのくらいの大きさですか。

小島 個人的に作るのだから、一概には言えないけど、5mぐらいの網は比較的小さめの網で、大きい網になるとそれよりも2mぐらい長くなる。長ければ長いほど、遠心力で網がよく広がる。

Q 投網の重さは何キログラムぐらいになりますか。

小島 10キログラムぐらいかな。鉛の大きさも魚を獲る網によって違って、あまり重くすると網の広がりが悪くなるし、軽すぎると打ちやすいけど、沈むのが遅いから、魚が入りにくくなる。

Q 昔の網の素材は、綿や麻と伺いました。いつごろから、今のようにテグスになったのですか。

小島 昭和35年ぐらいからかな、私が小さいころにはもう出回っていました。やはり、手入れが要らない。昔の綿とか麻だと、漁から帰って来ると洗って干して、渋につけたり、卵の白身を溶いて網にぬって乾かしたり、網を丈夫にするために、そういうことを年中繰り返してないといけなかった。テグスは、洗って干しておけばよいので、そういうことはなくなりました。

Q 手入れが容易になったのですか。

小島 けれども、テグスは糸の弾性のせいで、夏場は柔らかいけど、冬場は硬くなって目が開かなくなるから、網が広がらなくて打ちづらい。

投網は網の重みと重心のバランス

Q 細い和船に立ちながら投網を打つのは難しいですか。

小島 慣れるまではね。最初は陸の上で網を振る練習から始めます。タライの上に立って網を振って、バランスをとる練習をしたりします。でも、「よし、広がった」と思って、いざ、船に乗っても、揺れている所でやるから、やはり、むずかしい。

昔の小さい船だと、自分が右左に動くことで重心が変わるから、逆に、揺れを利用して、網を投げるときに力を入れられる。だから、昔の小さい船の方が、今の船より、慣れてしまうと、網は打ちやすい。小さい船は、波で揺れるから、ただ立っているとちょっとふらつくけれど、網を持っていると、不思議と大丈夫なんです。網の重みと重心のバランスでしょうね、怖くないですよ。

Q 海に落ちたことはありますか？

小島 昔、一回ありました。それは網を振ったためにではなくて、投げた瞬間に網が手に引っかかって、下げ潮が早かったんで、網を外す間もなく、そのまま、あっという間に飛び込んでしまったんです。

投網はいつもお客さんが見ていて、初めのうちは網が広がったり広がらなかったりするから、お客さんから「しっかりしろよ！」って声がかかる。そういうプレッシャーも感じながら、やらなきゃならないんです。

昔は魚が獲れるまで網を打っていた

Q 昔の投網漁は何人でやっていたのですか。

小島 基本的に投網は、舵(かじ)っこ(運転する人)と、網打ち(網を打つ人)の2人です。

Q 先ほどおっしゃった、「寄せ打ち」や「並べ打ち」というのは、投網漁の普通の形ですか。

小島 昔はそれが当たり前でした。お客さんも朝8時ぐらいに早く来て、それで船で沖の方に行くと、他の投網船が集まるのを待っていました。

昔は、獲った魚で天ぷらとかお刺身を作ったりをしていたので、魚を獲らないとお昼にできない。獲れるまで網を打たなくてはならなかったわけです。

Q 投網漁は、お客さんに見せる漁なのですか。

小島 そうですね。ただ、冬場はお客さんが少なかったんで、うちの親父の代までは、冬場は獲った魚を売っていました。今も、たまに保存会で投網を打って、市場に卸したりしています。昭和45年くらいまでは、投網のお客さんは、本当に魚が獲れるのが楽しみで、それを見ながら一杯やって というのんびりした感じでした。今の人にそういう遊びを勧めても、

ちょっと無理じゃないかと思う。長時間、それこそ6、7時間も船に乗って遊ぶわけですから。

うちの親父やお爺さんの時代は、お客さんが船に入ってくると、まず、船首(みよし)にお酒を撒いて、豊漁を祈願した。船首は神聖な場所なので、お客さんが下手に船首に乗ると、船頭は「なんで、土足で乗ったんだ」と怒った。そういう時代もあったんです。

埋め立てとともに海は汚れていった

小島 私が小さい頃、昭和45年頃は、ちょうど社会で公害だ、水が汚い、と騒がれていました。それから、だんだんお客さんが減り始めた。

そのちょっと前には、「隅田川は近くに行くと臭い」と言われました。隅田川にも投網をやる人は結構いたんですが、水が汚くなるのが早かったので、投網をやめて釣り船を始めるところが多かった。隅田川の浅草橋あたりには、「網」が付く船宿の屋号がいくつもありますが、こういうところは、もともとはお客さんを乗せて投網漁をやっていたところなんです。

旧江戸川の場合は、悪臭はそんなになかったのので、投網をやる人が今も残っています。

Q その頃は、あのあたりは汚いから避ける、というように網を打つ場所を決めていたのですか。

小島 うちの場合は、旧江戸川でやっていたけれど、海が汚いために、一時は上流の金町(葛飾区)の手前まで上がって、網を打っていました。そうやって川を上るのが10年ぐらい続いたかな。その頃は埋め立て全盛期で工事だらけ、海に行っても水が汚いので、海より川に行く。

もちろん、埋め立てだけが問題だったわけではなく、当時は「汚いものは全部川へ捨ててしまえ」という風潮がありましたから、いろいろな原因で海が汚れていったのだと思います。

浅瀬がもっとあれば、東京湾はいい海になる

Q 先程、東京湾も一時期に比べてきれいになったとおっしゃいましたが、埋め立ても下水の流入もなかった頃と比べると、どうでしょうか。

小島 埋め立てが始まる前は、浅瀬がいっぱいあったから、たとえ川が汚れても、海の浄化する力が強かった。浅瀬で貝掘りしたりしました。

でも、埋め立てが始まると同時に、水は一気に汚くなった。浅瀬で葦が生えているようなところがたくさんあれば、水の再生も早いんだろうけど、人間の力で水をきれいにすることは大変です。今でも、大雨が降れば川の水が汚れて、ハゼが死んでしまうなどの影響があります。水をきれいにするという事は、むずかしいことだと思います。

加えて、夏場は水が温まって、深場からだん

だん無酸素状態になっていく。浅瀬でも、海底の泥の状態が悪くなる。毎年、毎年、この繰り返しで、魚が湧いても、しゅんせつで作られた穴が本当に無酸素状態で、そこから無酸素水が上がってくると、魚はみんな、夏場の暖かい時期に死んでしまう。

こういう穴を埋めて、浅瀬をもっと作れば、東京湾もすごくいい海になると思う。

Q 今日はお忙しいところ、お時間をいただき、どうもありがとうございました。



小島 貞明さん
(こじま・さだあき)

東京東部漁業協同組合理事、東京都漁連内湾釣漁協議会相談役を務める。趣味はスキー。

お話を伺った学生の ひとこと感想

東京湾の汚染状況の変遷を、現場の人から聞くことができ、大変勉強になったが、私たちが直面している環境問題の深刻さにも改めて気付かされました。(松田 祐樹：東京海洋大・海洋環境学科 3年生)

今回は座学ではできない、現場を学ぶということができました。当日はあいにくの天候で、海に連れて行っていただくことはできなかったのですが、屋形船ということで、水上ならではのお仕事に興味をわきました。これからも水環境や法整備などの知識を深めていきたいと思います。(糸井 孔帥)

僕は今まで屋形船というものに関してほとんど何も知らず、もちろん乗ったことさえありませんでした。しかし、インタビュー訪問にあたっての事前学習も含め、あみ貞さんのお話を聞いて、屋形船の伝統を知り、また利用者には昔からものすごく愛され続けているということが感じられました(上江洲 智史)

私たちが生まれる以前から、東京湾で屋形船と投網を営んできた小島氏にこうしてお話を伺うことができ、大変嬉しく思いました。(竹下 晃平)

私は、江戸川区に住んでいます。実は、「あみ貞」さんの屋形船には、区のイベントで半年ぐらい前に乗せていただいたばかりでした。おかげで、地元の水産業の実情への理解が深まり、とても貴重な経験をさせていただくことができました。(辰巳 ちあき)

(以上、東京海洋大・海洋政策文化学科 3年生)



江戸前ESD活動報告～やってきたこと、やりたいこと

江戸前ESD事務局

今までやってきたこと

江戸前ESD協議会は、2006年10月に東京海洋大学（以後、海洋大）海洋科学部でワーキング・グループが石丸隆・河野博両教授を中心に結成され、始まりました。この時期に、平成18年度環境省「持続可能な開発のための教育の10年」推進事業に採択されたことがきっかけです。

海洋大の目の前にある、東京湾、特に「江戸前」と呼ばれる湾奥部について、研究 大学教育 地域連携の3本柱を、学内外関係者で連携して進めていき、という構想は海洋大内の東京湾研究者の間に前からありました。江戸前ESDによって「地域連携」が先に発進したわけです。

さて、地域と連携してESD教育を進めよう、と意気込んだのは良いですが、いったい誰を対象にどのように行えばよいのか、そもそもESDとはなんだろうか、とすべてが手探りの状況でした。そこで、小中高の学校の先生、博物館学芸員、市民団体・地域で環境教育を実施しているの方々にお話を聞きながら、江戸前ESDの進め方を模索しました。

2006年10月～07年3月までの活動

- 10月 江戸前ESD協議会ワーキング・グループを東京海洋大学海洋科学部で結成。石丸隆・河野博両教授を代表に本学教職員約10名で開始しました。
- 11月 海洋大生を対象にパイロット事業を開始（海洋政策文化学科後期開講「地域政策論」）。
- 12月 高校教育における大学との連携のニーズについて理科教諭にインタビュー；江戸前ESDに参加下さりそうな、東京湾岸の博物館などの方々をお誘いしました。
- 1月20日 海洋大で第1回江戸前ESDワークショップを開催。江戸前漁業者、湾岸地域博物館、海洋環境教育を実施している市民団体の有志、本学教員・学生で江戸前ESDの問題点、江戸前ESDを地域で実施する可能性について話し合いました。
- 2月8日 港区青少年委員の方々との会合、江戸前ESDを港区でおこなう相談をしました。

2007年4月～8月までの活動

- 4月 海洋大生有志が、大田区「大森ふるさとの浜辺公園」（以降、ふるはま）での環境学習活動に参加開始。
- 5月21日～25日 英国ボーンマス大学の沿岸域管理研究者・沿岸管理実務者の方々4名来学、海洋大生・教員とともに東京湾管理について視察し、前後にセミナーを2回開催しました。
- 6月18日 海洋大生企画で、藤塚悦司さん（大田区立郷土博物館）をお招きして、「大森ふるさとの浜辺公園で私たちに何ができるか」ワークショップを開催。
- 7月10日 海洋大にて江戸前ESD第1回協議会を開催。（詳しくは2頁目の記事を参照下さい。）
- 7月23日～8月30日 江戸前ESD企画展『江戸前を知ろうー「むかし」と「いま」の東京湾ー』を海洋大の水産資料館・図書館と共催しました。
- 8月2日 港区教員研修。12～13名の小中学校の先生を対象に「ワークショップで学ぼう！江戸前の海～持続可能な沿岸海洋のための教育～」ワークショップ開催。
- 8月6日 藤塚さん（大田区立郷土博物館）、小山文大さん（NPO法人地域パートナーシップ支援センター）、村石健一さんと「ふるはまワークショップ」開催。具体的な活動計画について話し合いました。
- 8月22日 江戸前ESD企画展の一環として、サテライト企画講演会『東京湾を語ろう』を水産資料館2階展示室で開催。講演は、「東京湾の漁業」（鈴木晴美さん、江戸前アナゴ漁師）、「東京湾のくじら」（谷田部明子；海洋大大学院生（博士課程））、「東京湾のさかな」河野博（海洋大・海洋環境学科教授）。

これからやりたいこと

江戸前ESD協議会は、3月までの話し合いから、次のように今年度の目標を立てました。

港区と大田区で江戸前ESDプログラムを実施、評価・改善の上、完成させる。

上記プログラム実践をとおして、地域の「江戸前ESDリーダー」を10名養成する。

大田区では、小山文大さん（NPO法人地域パートナーシップ支援センター）が行ってこられた大森ふるさとの浜辺公園での小学生を対象とした環境教育活動を海洋大学生がサポート、ワークショップをたびたび開きながら、区立小学校での「江戸前ESDカフェ（海洋大教員の出前講義）」の準備を始めています。

港区では、港区青少年委員である鈴木晴美さん（江戸前アナゴ漁師）、加藤知朗さんたちが今まで小学生を対象に行ってこられた環境学習活動を学びながら、これからの江戸前ESD活動計画をともに考えているところです。

江戸前ESDの活動は、昨年開始したばかりですが、「持続可能な江戸前の海」のために、私たちにできそうなこと可能性は、集まって話し合うたびにふくらんでいきます。これから、東京湾沿岸域の地域住民の方々、漁業者の方々、学校、博物館、水族館、市民団体、学生と教職員をどんどん巻き込みながら、この活動を具体的に充実させてゆきたいと考えています。

いっしょに地域で活動したいと思われる方は、ぜひお声をかけてください。（江戸前ESD事務局）

= 江戸前ESDに参加して気づいたこと =

東京湾のイメージとは

大島 弥生 (海洋政策文化学科・准教授)

江戸前ESD瓦版編集委員の大島です。どうぞよろしくお願い致します。

私は日本語教育が専門で、イメージの作られ方ということに興味を持っています。

今の30, 40代の大人、つまり小中高生の親世代にとっては、東京湾についての最初のイメージの源は「公害」や「公害を減らす努力」についての教育番組だったかもしれません。その後、「最近ウォーターフロントが人気らしい」とマスコミで聞きかじったぐらいで、大人になってからイメージを大きく変える体験はなかなかないでしょう。子どもたちはどうでしょうか。親世代からの東京湾体験の語りがぬけているとしたら、その空白にどんなインプットがなされるかによって新しいイメージが作られることとなります。

子どもたちに東京湾を体験してもらおう活動を続けていらっしゃる方々と江戸前ESDを通じてお会いすることができました。とてもインパクトの大きい活動だと思います。見る、触る、食べるといった行為を通じて強烈なイメージを作るでしょうし、そこで大人たちが東京湾をどんなものとして扱っているかも、子どもたちのイメージ形成に影響を与えるでしょう。では、ふつうの大人たちの東京湾イメージが断片だけで構成されているとしたら、それを書き換えるにはどうしたらよいのでしょうか。

大学はふつうとてかく知識や情報を供給するところとされているわけですが、一方的にしても受け付けてもらえません。「こういうことが知りたい」「その情報はこういうふう聞こえる」という声を集めることがまず必要なのでしょうが、江戸前ESDはそういう慣れない作業のきっかけなのだ、とあらためて感じています。

(おおしま・やよい)

発行 江戸前ESD瓦版編集委員会
〒108-8477 東京都港区港南4-5-7
東京海洋大学 海洋科学部 江戸前ESD事務局内
電話/FAX 03-5463-0574
電子メール edomae@kaiyodai.ac.jp



授業の映像記録をとる筆者。



編集後記



瓦版第1号を発行してから、いつのまにか半年以上たってしまいました。その分(と云ってよいのか、どうか)今号は枚数を倍増です。

編集体制も、東京湾(に限らず)漁業にたいへん詳しい馬場さんを委員長にむかえ、大島さんと3人の瓦版編集委員会ができました。

今号では、学生諸君ががんばって記事を書いてくれました。糸井さん、上江洲さん、竹下さん、辰巳さん、日野さん、松田さん、宮崎さん(五音順)ありがとうございました。

海洋大の堀本奈穂さんは、植物プランクトンの研究者です。「ふるはま」で汲んだ海水を顕微鏡で見る、小学校への出前授業「江戸前ESDカフェ」第1号を、今、堀本さんを中心に企画しています。この授業については、機会を見て、ぜひご報告したいと思います。

江戸前ESDは、新しいホームページを準備中ですので、しばしお待ちください。

江戸前ESD活動の情報交換のためのメーリング・リスト(ML)も準備中です。参加ご希望の方は、用件を「ML参加希望」として事務局へメールをお送りください。

今号では「ふるはま」を具体的にご紹介できませんでした。次号予告をかねて、活動風景の様子だけでもご覧下さい(下写真)(川辺)



ふるはまアルバム

(撮影：日野佑里、2007年6月29日と7月11日)

「ふるはま」で小学生と生物調査しました。

小山文大さん(NPO法人地域パートナーシップ支援センター)が四手網を実演しています(右写真)。



宮崎佑介さん(海洋大4年生;赤シャツの人)は通称「お魚博士」(左写真)。



影山光さん(海洋大4年生)が、網にかかった生き物を見せています。(右写真)

